

不廻向論

藤原幸章

一

われわれにとって「かならず無上涅槃のさとりをひらくたね」（銘文）は、ただ念仏の一行である。それゆえにわれわれもまた、「念仏にてまいりたまひし父母の、みあとをふみて」同じく念仏伝統の歴史につらなり、「念仏成仏是真宗」をわが身において身証することが出来る。まことに真宗はこのこと一つを軸として形成せられてきた。

ところで念仏が「安養浄土の正定の業因」（銘文）であるとは、それが彼の仏の願に順ずる行であり、「選択本願之行」であるからであって、そのほかのいかなる理由によるものでもない。「選択本願之行」とは、如来において選択せられ、廻向せられた「浄土真実之行」であるからである。

然るに選択本願の故に念仏一行が正定の業であるとせられるとき、それは直ちにわれわれの内在的な三業の行の絶對否定を意味する。念仏とは、もともと如来の行であって、些かも人間的な自行を容れるものではなく、それは「弥陀廻向の法」であり、如来廻向の大作であるからである。念仏が法然聖人においても、また宗祖においても、凡聖自力の行ならざる「不廻向之行」とせられる所以はここにある。（選択集二行章・行巻）

ところで念仏はいかに弥陀廻向の法であり、衆生不廻向の行であるといっても、その行ぜられる場所は、われわれの三業をほかにしてはありうべくもない。現に善導は念仏が正定の業である所由を説くに当たっても、「一心に弥陀

の名号を専念して、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざる者を、是を正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」(散善義深心釈下)と鮮明する。ここに「行住坐臥」といい「念々に捨てず」とは、明らかにわれわれの三業以外のものではない。としたならば、正定業の念仏も所詮人間の三業をその場とするものであって、その限りそれは雑行と同居し、諸行諸善と同じく衆生廻向の自行と異るところがないこととなるであろう。しかるに何故に同じく衆生三業の場でありながら、念仏のみが諸善と隔絶して不廻向の行とせられるのであろうか。一体不廻向の念仏とはいかなる意味であろうか。わたくしはさきに「正定業の論理」と題して如来選択の願心をたずね、念仏が特に正定の業とせられる所由をこの視点からあとずけて来たことであったが(本誌第二号)いまここでは、われわれの実践の側から念仏不廻向の問題をとりあげ、もってさきの「正定業の論理」をさらに徹底したいとおもう。いわばこの小篇は第二号所論の続篇に相当するものである。

二

念仏が不廻向の行であるといふ切った最初の人は、いうまでもなく法然聖人である。『選択集』二行章の私釈にみえる五番相對の第四に

正助二行を修するは、縦令別に廻向を用いずとも自然に往生の業と成る。

と断言するもの即ちこれである。いわゆる五番相對とは正行そのものの絶対的意義を開頭するため、雑行に對較して設けられた五對の価値批判の範疇であつて、それは(一)親疎對、(二)近遠對、(三)無間有間對、(四)不廻向廻向對、(五)純雜對の五番からなる。二行章の敘述に従えば、かくの如き五對は、直接的にはこの章のはじめに引用する『散善義』就行立信後後半の「若し前の正助二行を修すれば心常に親近して憶念断えず。名づけて無間と為すなり。若し後の雑行を行すれば、即ち心常に間断す。廻向して生ずることを得可しと雖も、衆て疎雜之行と名づくるなり」との善導の体験的批

判をうけて、これを徹底したものである。しかもさらに根本的には、同じくこの章に引用した『散善義』の疏文前半の、正雜二行・助正二業の精細な批判をふまえて成立した、称名正定業論そのものを承けたものであることは、その構成からいっても容易にうなずかれる。されば五番相對とは、善導の五種正行論に対する法然自身の領解を表わすものであって、要するにその中核は、正定業たる念仏の絶対的意義を、しばらく雜行や助業に比顯したものと見える。従って、親といい、近といい、無間、不廻向、純ということも、念仏において法然自身が感得した「順彼仏願故」の体験そのものを、実践的立場から鮮明したものとすべきである。かくしてここに五番の中軸はおのずから第四の不廻向廻向對に結ばれて、特に念仏不廻向ということが他の四番の親、近等をも貫き支える核心として、念仏一行が正定の業とせられる所由を説きあらわすものである。五種正行論において、その中心たる称名正行が善導によって第四におかれると同じく、いまこの五番相對論においても、念仏不廻向論が特に第四に論ぜられるということも、決して偶然ではあるまい。さらにまた、この不廻向論の証文のみが他の四番のそれと異って、助業には全くかわることなき善導六字釈の疏文一つを真正選からとりあげている事実も、この場合特に注意せられるべきであろう。かくして正雜助正の批判をふまえてうちたてられた、行住坐臥念々不捨者の念仏一行は、法然において「別に廻向を用いずとも自然に往生の業と成る」と、特に衆生不廻向の行として領解せられることとなったのである。

三

然らば念仏が不廻向の行であるとはいかなる意味であろうか。いかに彼の仏の願に順ずる行であるとはいえ、称名は衆生三業の場において行ぜられることに変りはない。それゆえに善導は「若し口に称するには即ち一心に専ら彼の仏を称し」といい、さらに「行住坐臥時節の久近を問はず、念々に捨てず」と規定しているところであった。としたならば、何故にそれは敢て「廻向を用いざれども……」といわれるのであろうか。

およそ廻向とは「己が善法を廻して趣向する」との『大乘義章』（九）の解釈が最も一般的であろう。同書にはさらに菩提廻向、衆生廻向、實際廻向の三種に分類し、これをもって發菩提心とならんで最も重大な要法と定めていることは、常に注意せられているところである。のみならず『観經』にもまた廻向發願心をもって三心の一と説くこと、周知の如くである。もし廻向を不用としたならば、定散の諸行は勿論、念仏といえどもその対象を失うこととなるであろう。「但だ其の行のみ有るは行即ち孤にして亦至る所無し」（玄義分）といわれる所以である。されば廻向ということそのことは仏教一般における極めて重要な概念であって、法然といえどもこれを無視したり否定したりすることは出来ないはずである。それゆえに法然は、ここで敢て「無廻向」といわず、注意深く「不用廻向」と表現していることは、われわれの先学も既に注目しているところであるし（たとえば道隱の選択集要津録）、また早く西山本山義祖康空示導も指摘しているところである。（玄義分康永鈔）

然らば「無廻向」とはいわず「不用廻向」というとは、どのような意味であろうか。われわれは直接二行章の本文につくこととしよう。

第四に不廻向廻向とは正助二行を修するは、縦令別に廻向を用いざれども自然に往生の業と成る。故に疏の上の文に云く……善導の六字釈を引く……。次に廻向とは、雜行を修するは必ず廻向を用いる之時往生之因と成る。若し廻向を用いざる之時は、往生之因と成らず。故に「廻向して生を得べしと雖も」（上掲「就行立信釈」の結文）と云える是なり。

これによれば念仏が不廻向であるとは、「別に廻向を用いざれども自然に往生の業と成る」との意味であって、それは「必ず廻向を用うる之時」はじめて往生之因と成りうる雜行に対顕せられている。されば不廻向とは、雜行が廻向を必須の条件とするに対して、念仏には全くこれを要としないとの意味に解せられる。この場合「別に廻向を用いず」といい、「必ず廻向を用いる」という廻向とは、上述『大乘義章』に説くごとき、「己が善法を」もって果に対

し、菩提に対して意義あらしめんとする、目的的行為を指す。従っていま法然の不廻向とは、かくの如き一般的聖道門的廻向の全面的否定であり、いかえれば必ず廻向を用いなければ成立し得ない聖道教の論理の全的否定を意味するものといえる。としたならば、法然において否定せられたものはわれわれからする廻向であり、蓮師のいわゆる「まいらせごころ」そのものであって（御一代聞書）、それはいかなる意味においても廻向を認めないとの意味ではない。むしろ聖道門的廻向の全面的否定という裏には、法然自身において彼の仏の選択本願そのものから感得せられていた久遠劫来の仏力、「阿弥陀仏の大願業力」が、深く身証せられていた事実を物語るものであらねばならない。即ちそれはわれわれからする廻向にかわる仏からの廻向ということである。

称名念仏は是れ彼の仏の本願の行なり。故に之を修する者は彼の仏の本願に乗じて必ず往生することを得るなり。

(二行章)

名を称すれば必ず生ずることを得。彼の仏の願に依るが故に（総結の文）。

とは、正しく、この事実の体験的実践的表明である。「彼の仏の願に乗じて必ず往生する」、これこそ法然自身に確かに領受せられた「阿弥陀仏の大願業力」であり、彼の仏の選択本願そのものであって、それは「別に廻向を用いずとも自然に往生の業と成る」念仏の一行において確かめられた仏力自然の世界であり、仏よりする廻向そのものである。聖道門的廻向にかわる仏力他力であり、自力にかわる他力の廻向である。念仏とは正にかくの如き仏力の廻向を身証したものの体験的表示にはかならない。かの仏の大願業力が煩惱具足のわれわれにまでくる。求めてしかしてくるのでもなく、きたるべくしてくるのでもない。あたかも『観経』華座觀に突如として来現した立撮即行の阿弥陀仏の如く、厭苦縁における王宮降臨の積尊の如く、それは正に一方向的に来る。五番相對論において善導の三縁釈を引用しつつ、親・近・無間等と念仏者の体験を語りきたった法然が、つづいて念仏は「別に廻向を用いずとも自然に往生の業と成る」といい、さらに「純ら是れ極楽之行なり」とまでいわずにはいられなかった所以であろう。「弥陀如来

は因位の時、もはら我が名号を念ぜんものをむかえんとちかいたまいて、兆載永劫の修行を衆生に廻向したもう」（三部釋釈）といい、「衆生のおのれが業力によりてむまるといわばかたかるべし。我須らく衆生のために永劫の修行をおくり……わが名号として衆生となえしめん。衆生……わが願にこたえてむまらることをうべし」（元久法語）とは、かくの如き念仏不廻向の構造を積極的に表わした法然の領解である。念仏はまことに仏のものであり、向うからここまでくるものであった。としたならば、たといわれわれの汚れた口業にあらわれようとも、もともと「廻向したもう」たものとして念々が仏力の顕現であり、彼の仏の願行が成就せられゆくすがたである。「尚に知るべし、本誓の重願虚しからず。衆生称念すれば必ず往生すること得」（往生礼讚）とは、かくしていわれることであろう。われわれが念仏するとは、所詮仏からくる廻向に催されるすがたであるといわねばならない。されば念仏にも明らかに廻向を伴う。但しそれはこちらからする廻向ではなくて、その主体は仏力にある。それゆえにこそ念仏はわれわれの三業にあらわれつつ、よく「自然に往生の業と成る」のである。正に不廻向というよりほかにいいようがないであろう。

かくして不廻向とはこちらからする廻向の全面的な否定ではあっても、仏からくる廻向の否定ではない。それどころか、仏力の廻向に支えられればこそ、われわれからは不廻向と断ぜられるものであった。若しいかなる意味においても廻向を用いないということであるならば、そもそも浄土宗そのものも成り立ち得なかつたであろう。不廻向であって無廻向ではないとの所由は、かくしてうなずかれるであろう。

然しながら念仏には別に廻向を用いずとは、単に浄土宗成立のための当面の便宜に止るものでもなければ、況んや聖道門否定のための特殊な論理でもない。それはただ四十余年の前半生を捧げて、ひたむきに追求した聖道的論理のすべてに絶望せざるをえなかつた法然が、身をもってうなずくことができた選択本願念仏の体験ということ一つを本質とする。即ち「順彼仏願故」の一文に遭うて、豁然、四十余年の苦眼をひらきえた法然自身の全身的な感激に基く

發言である。自ら仏に廻向すべき「己が善根」を持たなかった法然においては、いかにしても聖道門の論理に安らぐことは出来なかつたのである。蓋し不廻向ということは、所詮仏に捧げるに足りる眞実を、自己自身のうちに見つける術を見失なつたものにして、初めてよくうなずかれる仏力難思の世界であるといふべきである。既に善導はきびしく内省している。「たとい日夜十二時急走急作してあたかも頭燃を炙うが如くしても、三業の所修すべてが雜毒であり、虚仮であり、不眞実である。従つてこの不実雜毒の行を自ら廻向して彼の仏国に求生するともこれ必ず不可である」(至誠心積)と。ここに至つてわれわれはなお自ら莊嚴するべき眞実があると固執することが出来るであろうか。仏に捧げるべき自善があるといえるであろうか。もはやこちらから廻向するべき自善も眞実もわれわれにはない。この事實をありのままに自覚するものこそ、やがてこのもののためにする大願業力が信知せられ、向うからくる仏力の廻向がうなずかれる。「凡そ施こす所、趣き求るが爲に、亦皆眞実なり」(金沢文庫藏、建長六年書写「三部經大意」)とは、かくしてうけとられた上掲につづく善導至誠心積に対する法然の領解である。ここでは明らかに法然自身によびかける仏からの廻向が確かめられている。眞實は貪瞋邪偽奸詐百端の自己に向つて仏の側から施される。それゆゑにそれは虚仮雜毒の三業にあつても、亦よく眞實の行として現行せずにはおかないのである、と。尤も法然のこの解積は必ずしも疏文の当面に忠実ではないかもしれない。けれどもさきの善導自身における厳しい内省批判に同感せざるをえなかつた「余が如き下機」法然にとつては、かくしてこそ疏文がはじめてよく聞き開かれえたと共に、ここに「愁情弥深く字意増盛んな」(黒谷源空上人伝)る法然の、起死回生の道が見付けられたのであつた。われわれはこの法然の領解を聞いて、「凡そ施したもう所趣求を爲す、亦皆眞実なり」との、宗祖におけるさらに徹底した解釈が、單なる偶発ではなかつた事實を知らしめられることもとよりのことながら、ここにこそ法然における不廻向論の成立契機を觀取することが出来るのである。

かくして念仏は、もとより人間三業の場に行われつつ、しかもその本質においてみなこれ仏の眞實の宛らなる現行

であり、かの仏の願行がここまで来たすがたそのものである事実を、実践的体験的立場から表頭したものが即ち法然の不廻向論であった。およそ人間の三業を場とする行為である限り、よしそれが念仏であろうとも、全面的にこちらからする廻向の自善としてののみうけとられてきた一般の教界に対して、殊更にこれを不廻向と断ずることによって、仏からの廻向という全く新たな方向が確かめられることとなった。明恵ならずとも、不廻向と聞いてはこれを黙視しえなかつたであろうに相違ない。何となれば、不廻向とは人間三業の否定であり、こちらからのみしてきた聖道門の論理の全面的な否定を意味するからである。

四

上来によれば念仏は自然に往生の業を成ずる、それゆえに今更にわれわれからする廻向を用としないという。然らば不廻向論は具体的にはどのように展開せられているであろうか。われわれは再び二行章の私釈に帰らなければならぬ。上に注意した如く、二行章には不廻向論の根拠として、ただ善導の六字釈一つを引用しているにすぎない。しかもそれに対して法然は、あたかも自明の理であるかの如く何等の説明をも加えてはいない。蓋し不廻向の証拠は全く善導六字釈に尽されているというのであろう。さればわれわれとしては所引の六字釈に聞くよりほかに別の道がないこととなる。

ところでいわゆる六字釈は、周知の如く念仏別時意方便説に対する善導返難の正文である。そこにはわれわれの称仏六字そのものの上に願行の具足が指摘せられ、以て念仏往生の確かさが絶対の自信のもとに証明せられている。但しいうなれば、この文は願行具足ということの結果論であって、かくいわれうる本質はむしろ仏の願力そのものにあるといわなければならない。それゆえに善導は願行の具足を力説したこの一節の結びには、念仏往生者をもって「辺方化に投ずる」と諭え、特に「仏の願力を以て皆往かざるは莫し」と、仏願力をもって願行具足必得往生の本質的

根拠としているのである。蓋し願行具足とは以仏願力の故に然らしめられるのであり、念仏往生とはそのまま願力往生にほかならぬからである。「順彼仏願故」といい、「本誓重願不虛、衆生称念必得往生」という所以である。即ち念仏は他力であり、仏力の廻向である。さればわれわれとしては仰せにしたがい、願力に乗ずるほかにはない。今更にこちらから廻向を用うることは無意味であり、あやまりである。法然がいま、願行具足を証明した善導六字積の短文のみをあげて不廻向の証文とする本質的理由は、かくしてうなずけるであろう。念仏はいついかなる場合においてもわれわれからは不廻向でなければならぬ。くり返しいうごとく、それは「彼の仏の本願の行」であり、他力の行であるからであって、下品十声称仏にもともと十願・十行が具足するからである。この意味において今法然が善導六字積を引証することは、まことに適切であるといわねばならない。

然るに念仏は本願の行なるがゆえに十願・十行具足すると聞いて、われわれはこれを雑行に比較して、より多く仏力の外縁を蒙り易き自善であると考えようか。「南無と云うは……亦是れ発願廻向之義」というがゆえに、念仏は雑行に対してより廻向し易し等とうけとるようなことではないであろうか。念仏とは字義の如くわれわれが仏を念ずることと解する限り、このように理解するほかはないであろう。南無阿弥陀仏とはわれわれから阿弥陀仏に南無するとうけとるかぎり、もとより「行体に就いて即ち廻向」を具する念仏は何よりも廻向し易い易中の易行であるといえるであろう。即ち念仏はもとも廻向し易い行体をもった易行である上に、外からは仏の大願業力が加わるからである（良忠『選択伝弘決疑鈔』二・聖冊『決疑鈔直牒』）けれどもかくの如き念仏は西谷行観の批判をまつまでもなく「是れ猶お廻向を用うる義」（『選択集私記二・玄義分私記四』）であって、所詮それは凡聖自力之行として別時方便説に転落するほかはないであろう。

善導が十声称仏に「十願有りて十行具足す」といい切るとき、そこにはただわれわれ下凡のためにする大願業力のみが感得せられている。このゆえに「諸仏の大悲は苦ある者に於いてす、心偏へに常没の衆生を愍念したもう」（『玄義分』

といい、「一切善惡の凡夫生ずることを得る者は、皆阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁と為さざること莫く(同上)、「上一形を尽し下十念に至るまで、仏願力を以て皆往かずということ莫し」(同上) という。ここでは南無と阿弥陀仏は別のものではなく、阿弥陀仏はそのまます南無阿弥陀仏である。さればこそ臨終苦逼の機が行ずる易行の称名も、そのままにして絶対の勝義をもち真実の行となる。「別に廻向を用いざれども自然に往生の業と成る」とはまことに当然である。

五

かくして念仏は彼の仏の願行がわれわれにまで至りとどいたすがたであると聞くととき、どこにこちらからの廻向を挟む余地が残るであろうか。主体はもはやわれわれにはなく、仏が主体となる。念々が即ち大願業力のさながらなる顕現である。われわれから仏を念ずるといふよりは、仏がわれわれを念ずる。この仏の念力がはたらくがゆえに、われわれにもまた念仏が行ぜられる。念仏は正に仏力の表現であるといわなければならない。かくして宗祖のいわゆる往相廻向の大行という領解が無理もなくうけとられることとなるであろう。

『教行信証行巻』は、要するにこの仏力廻向の大行、即ち法然の不廻向の念仏そのものを明らかにすること一つを課題とする。それ故に、初めに先づ「無碍光如来の名を称する」われわれの念仏の根拠を示して、「然るに斯の行は大悲の願より出でたり」と明言する。「大悲の願」とは十七「諸仏称名之願」を指すこというまでもない。念仏は諸仏称名の悲願から出るとは、それはわれわれが行ずるものでありつつ、主体は正しく仏そのものにありと示すにある。それゆえにそれはわれわれの三業を場としながら、はるかにそれを超えて「浄土真実之行」、「選択本願之行」と標げられる。これこそ往相廻向の大行であり、不廻向の行である。かくして「諸仏称名之願」から起された『行巻』はつづいて願成就文等をはじめとする「聖言」を掲げて、竜樹の『十住論』以下、天親・曇鸞・道綽・善導と連引し、

さらに諸宗の人師の釈文を引き、しかして日本の源信・源空に及ぶ。念仏往生の本願は諸仏の称名として、歴史的には先づ釈尊の説教とあらわれ、真宗の七祖はもとより広く諸宗の人師に流れて、遂にわれわれにまで発動せずにはおかない事実を、これによって実証するものであらう。まことに『行巻』は大行顕現の歴史を語り、念仏伝統の系譜を説くものである。いいかえるならば、不廻向の行たる念仏相承の伝統を明らかにするものといえる。さればこの一卷はかの『歎異鈔』第二章に伝える、弥陀・釈迦・善導・法然・親鸞と顕現した「ただ念仏」の系譜と本質的に照応するものといえる。それゆえに『行巻』には『歎異鈔』が重視している善導その人の釈文を引き終ってここに特に私釈をおき、先の六字釈の一句一句を領解しつつ、これによって念仏が正しく仏力の廻向に外ならぬ事実を確かめてゆく。いわく

是を以て「帰命」は本願招喚之勅命なり。「発願廻向」と言うは、如来已に発願して衆生の行を廻施したもう之心なり。

「即是其行」と言うは、即ち選択本願是なり。「必得往生」と言うは、不退の位に至ることを獲ることを彰すなり。『経』には「即得」と言へり。『釈』には「必定」と云へり。「即」の言は、願力を聞くに由りて、報土の真因決定する時剋之極促を光闡するなり。……

ここでは「帰命」も「発願廻向」も「即是其行」も明らかに仏力の廻向であって、帰命すら「本願招喚之勅命」と解せられ、先に注意した「発願廻向」も同じく仏のものとしてせられている。即ちそれは衆生の行を廻施するべく仏において行ぜられた発願廻向であって、所詮「阿弥陀仏」とはわれわれのすくいのためにのみその意味があるとまでいう。かくして念仏は本質的には完全に仏のものとしてせられている。ここには上に一言した「発願廻向」をめぐって、こちらからの廻向とする如き解釈がしのびこむ際は全く存しない。

以上の如く善導六字釈を縁として念仏が仏力の廻向であることをいよいよ確かめた宗祖は、これを法照以下の諸師

の上にかえりみ、さらに源信を経て「よきひと」法然に至るや、正しく「希有最勝之華文・無上甚深之宝典」たる『選択集』を効果的に引用し、これに乗じてここにまた私釈を設け、巻頭以来のこの巻の主題を一応ここに結び止めている。ここにおかれた私釈とは、外ならぬ法然から直承した念仏は即ち不廻向の行であるとの明言である。

明らかに知んぬ。是れ凡聖自力之行に非ず。故に不廻向之行と名づくる也。大小の聖人、重軽の悪人、皆同じく斉しく選択の大宝海に帰して、念仏成仏すべし。

念仏は「是れ凡聖自力之行に非ず」とは、何という明断であらうか。それゆえにつづく「不廻向之行と名づくる也」との文意が、いよいよ明確にせられる。「不廻向」とはそもそも法然の発言であったが、それは上述の如く「縦令別に廻向を用いずとも……」と、不安定な表現において示されていた。しかもその証明には、六字釈を原文のまま掲げているに過ぎなかった。それゆえにそれは必ずしも常に法然の意図した原意のままにのみ、うけとられてきたとはい切れないものがあつた。然るにいま宗祖のこの明言を聞き、『行巻』巻頭以来の領解をかえりみて特に先の六字釈に基く私釈による時、われわれの前には迷路は全く閉ざされるおもしろいがあるであらう。かくして念仏の行人は、あらゆる人間的な差別を越え人為を超えて、皆同じく斉しく選択の大宝海に帰して、念仏成仏せざるはない。上掲六字釈の「必得往生」の祖釈が改めてしのばれる。

かくして『選択集』にはしまった念仏不廻向との断定は、ここにいよいよその完璧が期せられることとなった。念仏はまことに人間雑毒の三業に行ぜられつつ、しかも全く凡聖自力の行ではない。念々みなこれ仏力を主体とする他力廻向の行であるからである。

聖言・論説特に用って知んぬ。凡夫廻向の行に非ず、是れ大悲廻向の行なるが故に不廻向と名づく（浄土文類聚鈔）

真実信心の称名は、弥陀廻向の法なれば、不廻向となづけてぞ、自力の称念きらわるる（正像末和讃）
とは、不廻向の本質を、最も高いいいあらわした言葉である。ここではわれわれの行はそのままの法においてあらわ

され、念仏の主体は正しく仏力にあると示されている。かくの如き念仏はわれわれの行ずる行でありつつ、もはや人為をこえた向うからくる「弥陀廻向の法」であり、「大悲廻向の行」である。それゆえに所詮われわれからは「不廻向の行」といわなければならないこととなる。

六

われわれは上来幾度か何故に念仏は不廻向の行とせられるか、不廻向とはいかなる意味であるのか、との問を重ねてきた。けれども結局それは循環論を出なかつたようである。このことは不廻向ということそのことが、もともとこの種の問の一切を拒むものであるからであるうか。不廻向とは根本的にそのような本質をもつものであつたのである。上に既に確かめてきた如く念仏するとは、われわれから仏を念ずるというよりは、かの仏の願行がそれ自らを現行しゆくすがたであつた。諸仏称名の悲願からあらわれた「大悲廻向の行」とは、即ちこのことを示すものであつた。

それゆえに念仏はわれわれが仏を動かすための手段でもなければ、何事かを仏に求めるための方法でもない。むしろ逆にわれわれが仏から願われ、仏によって動かされてゆくすがたであるというべきである。もとよりわれわれが行ずるべき往生浄土の正定の業でありながら、そのもと仏から出で、仏を主体とする行為である。行じゆくものはわれわれ自身でありつつ、その主格は常に仏にある。「念仏の申さるるも如来のおんはからい」であり、「仏の行ぜしめたもう所を行ずる」という所以である。それゆえにそれは既に「凡聖自力之行」ではなく、これを敢て人間の行為に即していうならば、「不廻向之行」ということこそ最も適わしい表現であるというべきである。

まことに不廻向と表することによってこそ、念仏はいつかなる場合においてもこちらから廻向するべき自善ではないことが、われわれの実践に即して最も効果的にあらわされうるものであつた。さればわれわれにして一度この事に開眼したならば、単に念仏のみが不廻向であるというだけに止らず、上述の如きわれわれからする問や、その他

の身口意のはからいをも含めた人間三業の行為までが、同じく仏に対して不廻向でなければならぬことに気づくであろう。それゆえにわれわれが幾度間を繰り返そうとも、所詮は循環論の範囲を出ることが出来なかつたのも当然である。それでなければ不廻向ということそのことがくずれてしまうほかはないであろう。

かくして不廻向ということは、念仏は即ち「弥陀廻向の法」であり「一乘真妙之正法」（浄土文類聚鈔）である事実に自己の実践に即して身証したものの体験的発言であり、自身の行為の一端が仏にはからわれまいらせた他力の行であること、さらにいうならば、われわれの生そのものが、仏心大悲の法によってある事実に関眼しえたものの言葉であるというべきである。

他力の廻向

念仏は自力を頼む心を破るものである。それゆえに自力の行ではない。ひとえに大悲の本願に帰する身の行である。それゆえに、他力の廻向である。したがって念仏は、凡聖・善悪の人によりて、その徳を異にするものではない。かえってすべての人は、念仏の徳によりて一に帰せしめられるのである。ここに人みな道を同じうして、その徳を斉うせしめられる世界があるのである。

弥陀は全人の法として名号を選びたまひ、われらは自力の及ばないことを知って念仏を選ぶ。ここに選ぶ心の底に深く選びたまひし願心を知らしめられ、かえって選ぶ心も、選びたもうた願心の廻向なることを思わしめられる。恵むものは平等の大悲であり、受くるものは業苦のこの身である。この因縁において如来の本願もわれ一人がためと感ぜられ、わが身に称えられる念仏も、全人の道と身証せられる。まことに不可思議の事実である。

（金子大栄著『口語訳教行信証』傾解より）